第２章　松本ピアノ製作

渡米修業

１．渡　米【図2−1】

松本新吉は、築地工場で試作したピアノに満足できず、明治33年(1900)に渡米し、ブラドベリーピアノ工場でピアノ作りの技術を習得した。明治32年、山葉寅楠が文部省嘱託として渡米し、楽器業界を視察したことが刺激になったようだ。

渡米中、シカゴ到着の７月17日から、ピアノ工場での修業を終え、ニューヨークを出発する10月26日まで、小さい手帳に日記をつけている。【図2−2、2−3】三ヶ月余りの日記だが、アメリカ滞在中のピアノ作り修業の要点が窺える。(資料編：「渡米日記」参照)

手帳の日記は「チカゴ　７月17日」で始まる。

７月27日までシカゴに滞在し、ハメリヨンオルガン製造所、クラウンピアノ製造所、キンボール会社など、幾つかのピアノ工場、オルガン工場を見学してからニューヨークに向かう。ところが、７月28日、ニューヨークに到着し、ジャパニーズミッション(日本人のためのマンハッタンメソジスト伝道所)に住み始めてから約一ヶ月間、８月16日の日記「ハモン見に行く」以外には見学の記載がない。毎日、泊まっているミッションの台所掃除などをするだけで、渡米の目的、ピアノ作り修業に関しては、何もすることがない日が続いた。無為の毎日に新吉の気疲れがピークに達し、日記の日付を間違えるなどをした頃、８月27日㈪午後２時頃、ミッションに白髪老人がやってきて、「松本氏に面会を乞う」と言ったとき、新吉は、一瞬、誰が何のために来たのか、分からなかったようだ。老人はブラドベリー(Bradbury)ピアノ会社のＦ.G.スミス(Freeborn Garrison Smith：1828 ～ 1911)社長【図2−4】だった。

この面会で、28日㈫午後３時にブラドベリーピアノ工場を見学することになる。新吉は、日記の日付を一日間違い、Ｆ.G.スミス来訪を８月26日㈰と思い、28日のつもりで、29日㈬午後３時、ブラドベリー工場を訪問している。

８月29日の日記：

・・・・午後２時ミッション出て生江(ナマエ)君(メソジスト副牧師)と共にスミスを訪う。小生等の来るを待ち居り、直ちに手を取り頭を撫で、良く来りしと喜び、８階の工場に伴い、充分に説明す。第７、第６、第５、第４、第３、第２と順次見せて終り、云う様、何の品物が入用かと。問いに赤面致し、其実を話し候処、スミス氏の申さるるには、銭が無ければ買なくともよし。実に気の毒の事。何時なりとも予の工場に来り、学ぶべし。可成(ナルベク)多くを手と頭に入れ、帰れと。小生は此意外のことばに驚きたれども、折角の事故(コトユエ)、尚永遠の望の為と決心して、工場に入る事を約し、

カトローグ代の写真を買い、帰る。・・・

工場見学だけでなく、「何時なりとも予の工場に来たり、学ぶべし。可成(ナルベク)多くを手と頭に入れ、帰れ」というスミス社長の言葉に、新吉は感激する。工場のすべてを実習した松本新吉の熱中振り、自らのピアノ作り経験を基にしたスミス社長の指導振り、メソジストの牧師と信者の支援、すべてが感動的である。

コラム③　ブラドベリーピアノ（Bradbury Piano）

作曲家ブラドベリー（William Batchelder Bradbury：1816～1868）が友人達に、自分の名前を使うことを認めたブラドベリーピアノのショールーム移転記事が、1853年５月12日付「The New York Daily Times」に載っている。ブラドベリーピアノ製作がその頃始まったようで、F.G.スミスを採用したのもその頃だったらしい。1860年代には、F.G.スミスがピアノ工場長になり、1868年、W.B.ブラドベリーが亡くなったとき、スミスが社長になっている。アメリカの高名な長老派説教師タルメージ（T.DeWitt Talmage）博士が“sweet tone”という言葉を使った説教をしたのもこの頃のようで、1877年には、第19代ヘイズ大統領がホワイトハウスにブラドベリーピアノを持ちこみ、その後６代の大統領の家族が楽しんでいる。

タルメージ説教師の説教：

“If the angels are using musical instruments in heaven, the Bradbury piano would surely be there, because of its sweet tone.”（天国で天使が楽器を奏でるとしたら、その楽器は、sweet toneブラドベリーピアノに違いない）

（“Pianos and Their Makers”（Alfred Dolge、Covina Publishing Company）より引用）

ニューヨークマンハッタン5W,19Stと、ワシントンのペンシルヴァニアAveにブラドベリーピアノの５階建ショールーム（販売店）を建てている。

惜しむらくは、1911年にF.G.スミスが亡くなると、1915年にはブラドベリーピアノ会社が倒産したが、マンハッタンのブラドベリーピアノ販売店の建物はまだ残っている。【図2-5】

2．ブラドベリーピアノ工場

８月29日、スミス社長が工場全体を案内、新吉のピアノ作り修業希望を了解した。ジャパニーズミッションでの無為の暮らしが終わり、31日㈮からブラドベリー工場に通うことになる。

マンハッタンのジャパニーズミッションは遠い(注)ので、ブラドベリー工場付近の簡易宿（Cor. Raymond）宛の紹介状を、スミス社長が新吉の手帳に書いてくれた。そのブルックリンの簡易宿（Cor. Raymond）に住み、８月31日に念願のピアノ作り修業が始まる。

（注）マンハッタンのジャパニージミッションから、ブルックリンのブラドベリー工場まで約９km

８月31日の日記：

午前７時起床。食事終わり、直ちにブロックリンの工場に行き、仕事に取掛かる。

時、あたかも午前10時なり。スミス老人、小生の手を取り、シャツをまくり、仕事の支度に注意さる。予はこの時、氏の広大なる恩恵に感泣す。それより、塗物仕事に従事す。・・・

仕事を始めて一週間位経った９月６日、宿泊室に泥棒が入り、ベットのふとん、枕、シーツまで盗

まれ、ランプもなかった。寒い部屋で眠れずに夜を明かしたが、

「この夜、熱心なる祈祷を天上に捧げて心地よし」

と書いている。所持金が少なく、食事は菓子パンで済ますことが続いた。9月20日、知人から、金10ドルと毛布を送られ、「その夜は安眠す」と記載。その翌日、

9月21日の日記：

下痢のため、非常に身体疲労す。柏君より薬を送らる。この日、調律の試験を了う。午後1時より2時までに一台を調律す。調律師は非常に喜び、他の職工も拍手す。

と書いてあり、渡米以前に、日本で身につけ、調律師として発揮していた腕前に、ブラドベリー工場の調律師と職工達が感心し、拍手している。

工場で、塗り磨き、響板(サウンドボード)、アクション取付け、張弦(スツリング)、調律まで、ピアノ製作工程を一通り修業し、10月11日㈭で通勤を終了。工場図4枚受領。この後も、太鼓(新吉は響板を太鼓と称している)の設計、製作を続けた。修業は10月中旬までの短期間だったが、73歳のスミス社長は親身になって松本新吉を指導し、新吉が懸命に習得したこと、スミス社長が「忠実に我社の規律を守り、熱心にそして辛抱強く訓練を終えた」と褒め称え、工場の図面を与え、必要になれば免許証をいつでも与えるなど、山葉寅楠のピアノ工場見学(『渡米日誌』)と比べて、破格の対応だった。

証明書（西村武メモ）

此証明書の所有者松本氏は、数年の間、我製造所に在りてピアノ製造の研究を積たる者なり。氏は忠実に我製造所の規則を守り、熱心と忍耐を以て職業を学べり。氏は又我製造所の老練なる調律者の下に調律の術を修めたり。我製造所員一同はいたく氏の日本に帰るを惜しめり。氏は目覚ましき記録を残して往く者なり。氏がピアノの販売の前途多望なる日本国に於て大いなる成功あらんことは、余が熱望に堪ざる所なり。

ブラドベリ　ウェブスター　楽器会社　社長　フリーボンG.スミス

証明書（西村武メモ）

是は松本新吉氏が、F.G.スミス氏のピアノ製造所に於て、余の直接監督下に、其修業を卒えたることを証明する書券なり。而して余は、氏が第一流のピアノ製作者たることを承認す。

ニューヨーク　ブルックリン　ウィロビー　レイモント町

ウェブスター　ピアノ商会　調律部主幹　エドワード　J.アイコム

前年に渡米した山葉寅楠は多くの工場を見学したが、一般見学者の域を出ず、どこの会社も、響板やアクション製作部門は見せなかった。それに比べると、ブラドベリー社での修業期間が二ヶ月足らずであっても、新吉はピアノ作りの極意を習得したと云える。

10月24日頃、『ミュージックトレードレビュー（The Music Trade Review)』誌のインタビューがあった模様で、11月24日付け『ミュージックトレードレビュー』誌【図2-6】で

「ブラドベリー社のF.G.スミス氏と工場長は、松本新吉氏の才能が最高のものと語っている。彼の帰国は工場の誰もが惜しんでいる」

と伝え、

「松本氏が製作予定のピアノは日本の家のサイズを考えると、アメリカ式のピアノは適さず、5オクターブのピアノに限定されることになろう」

という結びになっている。(資料編：ミュージック トレード レビュー誌 参照)

生江(ナマエ)副牧師等によるニューヨーク日本ミッションの手配、ピアノ工場見学案内、スミス社長との話の通訳など、メソジスト教会の牧師、信者のバックアップは多面にわたっている。

スミス社長と新吉初対面のときの手帳日記に、「此人、五代メソジストの信者なりと云う」と書いてあり、1911年、F.G.スミスの死亡を伝える『ニューヨークタイムス(The New York Times)』の記事に、F.G.スミスが、ブルックリンの教会の仕事で傑出していたことが記されている。

銀座美以(ミイ)教会(ソーパー宣教師)から、サンフランシスコメソジスト監督教会(ハリス牧師(注))経由で、ニューヨークのメソジスト監督教会に、「メソジスト信者松本新吉のピアノ作り習得の支援依頼」が送られ、ブラドベリーピアノ会社のF.G.スミスが受取ったのであろう。マンハッタンのジャパニーズミッションで新吉が無為に過ごした一ヶ月は、銀座教会発信の依頼書がニューヨーク教会に届くまでに要した時間と思われる。

(注) ハリス牧師(Merriman Colbert Harris 1846～1921)：明治6年来日、明治7年、函館へ移り、キリスト教(メソジスト)を布教。明治11年、東京へ移り、築地美以教会で布教、美会神学校、耕教学舎等で教えた。明治19年、夫人の療養のためカリフォルニア(サンフランシスコ)に帰る。明治37年、日本・朝鮮の宣教監督として再来日。新吉が渡米した1900年には、サンフランシスコ教会牧師だった。

ブラドベリーピアノ工場での修業終了後、ミラーオルガン会社見学、東洋での販売契約、松本ピアノとしての必要材料購入なども行い、帰国の準備に入る。帰国を前に、ブラドベリーピアノ社で、ミュージック トレード レビュー誌 (The Music Trade Review) のインタビューを受け、11月24日付けミュージック　トレード　レビュー誌の8ページに、松本新吉の写真入りで、ブラドベリーピアノ社での修業振りと腕前を詳細に報道している。(資料編：「ミュージック トレード レビュー誌」【資料2-1】参照)　この記事は、日本の東京日日新聞始め、イギリスなどの音楽関連誌で紹介されている。

前年のミュージック トレード レビュー誌(1899年7月)に、山葉寅楠の記事があるが、オルガン事業が紹介されているだけである。(注)

『東京日日新聞』（明治34年１月18日）記事：

本邦音楽家の名誉。紙腔琴の発明者として有名なる松本信吉氏は、其後紐育のエフ・ジー・スミス氏に親炙して大にピヤノに関する研究を遂げ、遂に整調法に就き有益なる発見を為し、ピヤノを改造することを公にするに至りたりとて、同地の音楽雑誌は大に喝采の辞を放ちしが、氏は此頃帰朝し、友人鎌瀧某に謀り、其の主管する表神保町の商会より新発明のピヤノを販売することになれりと。

（注）「友人鎌瀧某に謀り・・・」以下の情報は、松本新吉家には伝わっていない。

『楽器の事典　ピアノ』（東京音楽社）の記事：

松本新吉氏の訪米について、イギリスの文献に次のように記載されている。

「1900年に松本新吉は日本のピアノのパイオニアとして、また最初の調律師としてもアメリカで絶大な歓迎を受けている。彼は日本で最初の調律師として仕事を始め、その後数台のオルガンとピアノを作ったが、これらに満足せず、アメリカの数多くの工場を歴訪し、ブラッドベリーピアノ工場で腕を磨いた。この工場のマネージャーは、彼のことを規律正しく、熱心でしかも忍耐強い人物であると絶賛している」

（注）『渡米日誌』（山葉寅楠著、浜松史蹟調査顕彰会）によると、どこのピアノ会社でも、響板やアクション製造部門は見せてもらえなかった。スタインウェイ社訪問は予定時に遅れ、工場の施設見学のみとなり、工場が思ったよりもこぢんまりとしていたのでがっかりしたと書いている。

『ミュージックトレードレビュー』（The Music Trade Review）（July 1 ,1899）記事の一部：表題 “Organ Building in Japan”

西洋のアイデアを吸収し、世界の発明に似たものを作る能力は、限りなく大きい。日本タイムス（The Japan Weekly Times）によると、静岡県の浜松にオルガンの大工場があり、いろいろなサイズのオルガンを毎月2,000台以上も作っている。創立者は、紀州出身の山葉寅楠氏である。彼は、時計や外科器具を作っていたが、あるとき、町の学校からアメリカ製オルガンが運び込まれ、修理を頼まれたことを、タイムスが伝えている。・・・・

この記事はオルガンだけで、ピアノの記載はない。

山葉寅楠の渡米と松本新吉の渡米の違いは、『渡米日誌』（山葉寅楠）の「解説」で大野木吉兵衛が的確に示している。

『渡米日誌』（山葉寅楠、浜松史蹟調査顕彰会）：「解説」（大野木吉兵衛）

・・・寅楠と西川、松本両家との間には、これまた決定的な相違があった。それはほかでもない。安蔵（西川寅吉の養子）や新吉父子が、特定工場に身を寄せて、じっくり本場の技術を習得しようとしたのに対し、寅楠は多くの工場を歴訪、見学と部品類の購入とに奔走した。生え抜きの和楽器工から転身した西川虎吉の職人気質や、この虎吉の薫陶をさらに浄化し、ピアノ作りの名匠を目指した松本新吉の動向とは、いささか異なる生涯を寅楠は歩んでいた。

アメリカから持ち帰ったものを較べてみると、

山葉寅楠購入品：（総計　6,400円余り）

ピアノ(メーソン　アンド　ハムリン社(注))　　1台
ピアノ製作工場で使う各種機械一式
ピアノのフレーム(「山葉製」を英語で入れる)　36個
弦、アクションなど
オルガンの部品各種

(注) メーソン　アンド　ハムリン(Mason & Hamlin)社：山葉寅楠が明治20年に修理した浜松の元城小学校のオルガンの製造元。このオルガンを参考に寅楠がオルガンを試作したのがオルガン、ピアノ作りの発端になった。メーソン　アンド　ハムリン社は、1883年からピアノ製作を開始。

松本新吉が持ち帰ったもの：ブラドベリーピアノ会社で手と頭に入れたもの。

ブラドベリーピアノ会社でピアノ作りの技術をマスターし、築地工場に帰って念願のピアノを作るべく、帰途についた新吉が乗っていた船「Empress of Japan」は、日本の沿岸金華山沖で大暴風雨に巻き込まれて沈没しそうになった。ブラドベリーピアノ会社で新吉が設計して自作した、ピアノの心臓部といえる響板始め、大事な購入品も海に投げ捨て、船員、乗客も積荷や土産物などを海に投げ捨てて船の軽量化を図り(『松本新吉伝』による)、何とか横浜港に帰ることができた。
「横浜到着11月17日から19日」と予定が公示されていたが、船の到着は11月22日だった。(『明治の楽器製造者物語』による)

アメリカから持ち帰ったものの違いは、大野木吉兵衛の「解説」を図示したようなものである。

ピアノ製作

1．妻るい昇天

松本新吉の渡米中、妻るい(32歳)は、6人の子供、長男広(12歳)、長女えい(10歳)、次男二郎(7歳)、三男三郎(5歳)、四男四郎(3歳)、五男五郎(2歳)を抱え、留守を守っていた。築地工場には紙巧琴とオルガンの在庫があり、それを販売して生計をたてていたのだろうが、販売はままならず、蓄えは残り少なく、食物も底を突きかけていた。

『明治の楽器製造者物語』(松本雄二郎、三省堂書店)記載：(築地工場留守宅の暮らし振り)

赤子を負い、両手にすがりつく子供をあやしながら、銀座の街角で紙巧琴やオルガン、ピヤノの広告ビラを配っていたが、ある時期、るいは食うや食わずであったという。

新吉が新湊町の我が家に帰り、これからというとき、妻のるいは肺炎になり、12月25日、32歳とい

う若さで昇天した。新吉の帰りを待つ暮らしの疲れで、身体が大分弱っていたのだろう。

子供達６人と周南村常代(注)に帰り、るいの墓を造って納骨した。

（注）周南村常代：明治22年、町村制施行により、常代村は新設の周南村に含まれた。

２．築地工場の生産再開

年が明け、明治34年早々、常代で幼児２人を母みやに預け、他の子供達を連れて築地工場に戻り、オルガン作りを再開した。

新吉は、帰国したら直ちにピアノを作り始め、ブラドベリーピアノ会社で習得したピアノ作りの技を活かしたかったことだろうが、るいの昇天、子育て、資金不足(借金蓄積)、ピアノ用の木材吟味、購入、木材のシーズニング(期枯らし)に長時間必要、などの事情があり、ピアノ作りは後回しにしてオルガン作りを再開した。一ヶ月に数台作っている。(『音楽』東京音楽学校、明治44年９月「松本新吉談話」)

『楽器の事典』(東京音楽社)に、松本オルガンは性能が優れ、音色が良かったと記されている。

新吉のオルガン作りには新しい工夫がこらされたようで、『音楽之友』第２巻６号松本新吉論文「有鍵楽器の構造及び保存法」(明治35年)の中に、「オルガンの保存」に続く項目「製造の意見」として、

> こんな注意をことごとく全うするように製造したいと思って、種々工夫の上、デスク型オルガンというようなものを作りだしました。私の工場で、目下、さかんに工夫して作っております。

と記し、その終りに、

> 私は、ピアノの製造には、一身、一家を抛(ナゲウ)って顧みない覚悟です。

と記している。

『音楽之友』第３巻２号「パイプオルガンに就て」(明治36年)の終わりにも、

> 拙者はピアノ製造に熱中するつもりなので、その説明の方が易くできそうに思いますから、追ってまた話しましょう。

と、ピアノ作りを目指す新吉の気持を記している。新吉は、オルガンを作りながらオルガンやピアノの技術論文を投稿する、明治のピアノ作り先駆者であった。

新吉投稿論文：（資料編参照）

『音楽之友』第２巻６号「有鍵楽器の構造及び保存法」明治35年

『音楽之友』第３巻２号「パイプオルガンに就て」明治36年

『音楽新報』第１巻５号「ピアノの撰択」明治37年

３．辻田つねと再婚

松本新吉は、故郷の周南村常代で亡き妻るいの墓を造った後、息子三郎と五郎を常代の母の元に預け、子供４人を連れて築地工場に帰り、オルガン作りを再開した。再開できたのは、銀座美以教会に属していたメソジスト信者辻田つねの献身的な手伝いと築地美以教会の管理者和田剣之助の支援があったからであろう。

明治34年９月23日、新吉（37歳）は辻田つね（24歳）と再婚した。媒酌人は和田剣之助（霊岸島病院長、築地美以教会管理者）である。

辻田つねは明治11年に、愛知県南設楽郡平井村平井の富裕な士族の家で生まれた。

『松本新吉伝』（大場南北、うらべ書房）記事：

つねは、明治11年、愛知県南設楽郡平井村平井（現、新城町）の辻田家で生まれたが、上京してミッションスクール（横浜聖経女学校）に業を受け、その後、銀座教会に属していた。・・・

つねは、横浜ミッションスクール（後の青山学院神学部女子部）を卒業・・・

（注）横浜聖経女学校：明治17年、横浜山手町で開校。アメリカ・メソジスト監督教会宣教師C.W.V.ペテン(Caroline W. van Petten)が開校した婦人宣教師養成学校。後に、日本女子神学校となり、青山学院神学部に吸収される。日本各地の士族の娘が入学している。生徒の年齢が18歳位から40歳以上まで幅広く、入学前に和漢学などを修め、基礎学力があった。

（注）聖経：聖書のこと。

辻田つねは、横浜聖経女学校を卒業後、銀座美以教会に属している。松本新吉は明治29年に銀座美以教会に移籍しており、松本新吉と家族が銀座美以教会の礼拝で辻田つねと会うことがあったのだろう。松本るゐが12月25日、クリスマスの朝、息を引き取ったことは銀座美以教会に伝えられ、辻田つねは、新吉にお悔やみを申し述べながら、残された子供達の面倒をみてあげたいと伝えたのではなかろうか。このような申し出があればこそ、周南村常代での葬儀が済むと、広、えい、二郎、四郎、４人の子供を連れて築地工場に戻ったのであろう。

幼い子供４人（満11歳～２歳）の面倒見は昼夜にわたることがあり、そのためには、辻田つねは築地工場に近い築地美以教会か、和田剣之助宅（越前堀１丁目４番地霊岸島病院）(注)で寝泊まりしていたかもしれない。明治29年、銀座美以教会に移籍した松本新吉は、明治35年には、築地美以教会管理者に

なっているので、築地美以教会との繋がりが切れていなかったようだ。

辻田つねによる４人の子育ては、和田剣之助の媒酌による結婚と進み、和田剣之助の支援による松本楽器合資会社の設立となる。明治35年２月26日、次女愛子が生まれ、翌年９月13日に三女光代が生まれている。

つねは、長女えい（るいの子）を青山女学院に、四郎を立教中学校から東京音楽学校に、次女愛子（つねの最初の子）、三女光代、四女幸子を木更津高女に、六男新治を青山学院に、七男剛夫を名古屋中学校に進学させるなど、先妻るいが生んだ子供達とつねが生んだ子供達の育成に努め、その傍ら、銀座教会の務めも果たしている。

つねの活動　（『銀座教会40年史』による）

銀座教会（中央美以教会の後身）明治45年４月発行「銀座教報25号」の婦人会の記録に、「ブラオン博士の母君の逸話につき、松本姉(注)、御家庭内の姉妹方の神を認められし感謝と信者の自省して真の救いに入るべきを語らる」という記事があり、婦人会の大正４年の幹事であり、明治43年の銀座教会堂建設費募集委員にもなっている。松本つねは銀座教会の活動家でもあった。

（注）姉：Sister（同教会の婦人会員、婦人の敬称）

和田剣之助

霊岸島病院長。住所（越前堀１丁目４番地１号）は霊岸島の中央、霊岸島小学校（現、明正小学校）の西側隣り。築地美以教会の管理者であると同時に、明治35年に築地美以教会と銀座美以教会が合同してできた中央美以教会の中心人物。明治37年松本楽器合資会社設立時と、大正12年松本楽器製造株式会社設立の出資者。

『痔疾特殊注射新療法』（森直卿著、朝陽堂、明治44年発行）の序を書き、「ドクトル　和田剣之助誌　東都霊岸島寓居に於て　明治44年正月」と記しており、当時の名医であった。

コラム④　霊岸島病院

『松本新吉伝』に、「和田剣之助霊岸島病院長」と記されている。明治時代初期は大きい病院がなく、医師は普通の民家で診療した。中央区観光協会のＨＰによると、明治７年（1874）に来日したイギリス人宣教師で医師ヘンリー・フォールズ（Henry Faulds）は明石町18番地（外国人居留地）に住んだが、居留地には日本人の立ち入りが禁じられていたので、居留地外、築地の南小田原町４丁目８番地の民家を借りて診療し、「築地病院」と呼ばれた。フォールズが明治19年（1886）に帰国すると、住む人のいない病院は荒れはてたが、明治35年に来日したアメリカの宣教師・医師ルドルフ・トイスラーが、築地病院を買い取り、再興した。この改良築地病院は、昭和８年には「聖路加病院」と改名した。

ヘンリー・フォールズは、日本の指印の習慣に興味を持っていた。大森の貝塚発掘に参加、土器に指紋を発見、指紋を研究した。明治13年（1880）、学術誌“Nature”に「科学的指紋法」を発表。世界初の指紋の論文といわれ、スコットランドヤード（ロンドン警視庁）が捜査に活用した。

築地病院の例のように、明治初期の病院は、民家であった。

アメリカのカリフォルニア大学医学部を卒業し、医師の資格を取った和田剣之助は、明治24年(1891)に帰国。それ以来、霊岸島の越前堀１丁目４番地(約300坪)に住んでいる。霊岸島病院はこの場所だったのだろう。和田剣之助は築地美以教会の管理者になっているので、明治26年11月、新湊町５丁目１番地に引越した松本新吉と出会うのも早かった筈である。明治40年１月の東京郵便局編「京橋区全図」でみると、和田剣之助住居(越前堀１丁目４番地)と松本新吉の築地工場跡地(新湊町５丁目１番地)の距離は約800mで、あまり遠くない。

４．松本ピアノ製作

明治36年春、完成したベビピアノ(小型で５オクターブ、61鍵)を第５回内国勧業博覧会(明治36年３月１日～７月31日)に出品、二等賞(注)【図2-7】を受賞した。一等賞はなく、ヤマハピアノと並んで最高位であった。西川ピアノは出品されていない。

新吉がベビピアノ(小型)を出品した事情は、『音楽』(東京音楽学校、明治44年)の記事「松本新吉談話」に、

「ピアノは、去る35年、大阪博覧会の開催を機として、私は小学校の教科用として、わざと小型のものを作って出品した。というのは、外国人は、多く小型のピアノを用いている。富の程度の低く、且つ、その方面の知識に乏しい日本には、やはり、小型が売れるだろうと考えたからであるが、結果は、予期に反し、誰一人目を掛けてくれる者がなかったので、やむをえず、日本にいる外国人の貸ピアノに利用した」

と書かれている。

(注) 第５回内国勧業博覧会で松本ピアノが受賞した二等賞は、第３回内国勧業博覧会で西川ピアノが受賞した有功二等賞(審査員の評価:「国産は外国の中級品にも劣り、独創性も見られない」『オルガンの文化史』)とは異なり、「有功賞」ではなく、国産ピアノの最高位の評価である。

明治34年から築地工場でオルガンを作りながら、明治35年に投稿した論文(『音楽之友』(学友社)第２巻６号「有鍵楽器の構造及び保存法」)に、「私は、ピアノの製造には、一身、一家を抛って顧みない覚悟です」と書き、明治36年春に投稿した論文(『音楽之友』第３巻２号「パイプオルガンに就て」)にも、「拙者はピアノ製造に熱中するつもり」と書き、明治36年春開催の第５回内国勧業博覧会にベビピアノを出品したことから、ピアノを作り始めたのが明治35年の夏以降のことと推察される。それまで、オルガンを毎月数台作り続けながら、ピアノの構造設計、必要部品の輸入手配、ピアノの中心となる響板の木材として蝦夷松(エゾマツ)を選定、購入木材のシーズニング(期枯らし)などを着々と進めたであろう。その成果として、出品の最高賞(二等賞)を受賞した。

明治37年10月の松本ピアノ広告に、ベビピアノ(61鍵)２機種(150円、180円)、松本ピアノ(85鍵)８機種(280円～500円)の表示がある。内国勧業博覧会が終わると、ピアノ作りが主体になり、明治37

年夏までの約１年間でピアノを10台余り製作した。明治37年８月、『音楽新報』（音楽新報社）に「ピアノの撰択」を投稿して、ピアノ作りの技(ワザ)を紹介している。ピアノ製作に先立って、築地工場を増築し、職工を採用したことだろう。工場の拡張、ピアノ製作のスピードアップは、後に松本楽器合資会社の出資者となる和田剣之助等の支援により可能になったと思われる。松本ピアノ製造の進捗状況は、明治37年の雑誌でも報道されている。

明治37年の雑誌記事(松本楽器合資会社設立前)：(『明治の楽器製造者物語』による)

松本ピアノ製造所　新ピアノ売出　　ピアノ製造家として渡米後、多大の苦心に苦心を重ねて、今や、重望を博せられたる松本新吉氏のピアノ工場にては、今度初めて氏の経営苦心になりたるピアノ数10台を製造せられ、大に新日本式のピアノを普及せらるるもののごとし。誠に楽会多望の今日、是等真面目なる楽器製造家の表れ出たるは、尚亦喜ぶべきの至りならずや。ピアノ専門家たるもの、是非一度氏の如何にピアノ製造と音楽発奏の方法に苦心せられたるを聞き、以て演技者各自の参考にせらるるも、是亦必要かくべからざることならんか。

『音楽新報』第１巻第５号「ピアノの撰択」の一部（資料編、松本新吉投稿論文参照）

響板は弦線の音色を豊富ならしめ、且つ音量を増大する必要なるピアノの部分である。此響板の特性は、（第一）堅牢で、同時に（第二）感じやすくなければならぬ。此二性を共有するようにするには秘訣を要する。西洋では響板を作るにはSpruceに一致して居るが、我松本ピアノでは日本産の特殊の木材を用いる。・・・・・

音色：ピアノの構造が如何に堅牢で、如何によく調子を保持するとも、音色が優美でなければ、そのピアノの価値は少ない。音色は実にピアノ撰択の主要なる眼目である。音色を発する本体なる弦線は勿論、これを打撃するハンマー及び音色の補助者なる響板が完全でなければならぬ。この三者の内、第一に欠点あるときは決して優美なる音色は成立しない。松本ピアノは音色のスウヰトであるということで、殊に在留西洋人の内に好評を博している。彼等の一人は、日本のために祝するとまで云うてくれた。スウヰト　トーンは我が松本ピアノの第一の特徴である。

「ピアノの撰択」に書いている「日本産の特殊な木材」は蝦夷松(エゾマツ)のこと。明治35年に松本新吉がピアノを作り始めるまでに、深川の木場で国産の材木すべてをチェックし、蝦夷松を選んだのだろう。「Spruce」は唐檜(トウヒ)のことで、蝦夷松は、トウヒ属に入る。後に、松本ピアノの木材購入担当者に、北海道の山の北側斜面に生えている蝦夷松に限るように指示しており、蝦夷松の木目にも注意していた。

『楽器の事典　ピアノ』(東京音楽社、1972)

その当時、つまり今から70年も前(1902年)の松本ピアノ、オルガンは次のようなものであった。

ピアノ：アクションはイギリスから輸入されていた。合板はなく、すべて一枚板で加工され、音量こそなかったが、音色はやわらかく、魅力的な音を持っていた。

オルガン：当時のオルガンは現在のように大量生産方式のものではなく、手工品的なものであったため、性能は極めて優れたものであった。もちろん、足踏み式のものであるが、種類としては、39鍵、49鍵、61鍵の楽器があり、ストップの種類としては、現在は殆ど見られない４個、７個、９個、11個、13個、16個などが作られていた。リードオルガンであるから、パイプオルガンのような華麗な音色は得られなかったが、さきに西川ピアノの際に述べたような多種類の音が組み合わされていたのである。箱型のボックスヒューマナー（トレモロの装置）もつけられており、音量はやや不足で、ペダルが重かったが、美しい多彩な音色であったという。

松本楽器合資会社

１．松本楽器合資会社設立

明治37年10月、松本楽器合資会社が設立された。

ピアノ・オルガン製造所：新湊町５丁目１番地
楽器販売「松本楽器店」：銀座４丁目４番地
資金：松本新吉5,000円、和田剣之助5,000円

官報　第6397号　明治37年10月25日
○合資会社登記簿　第11冊　第540号
一．商号　松本楽器合資会社
一．本店　東京市京橋区新港町５丁目１番地
一．目的　各種楽器ノ製造販売及其賃貸ヲ営業トス
一．設立ノ年月日　明治37年10月21日
一．存立期間又ハ解散ノ事由　明治47年10月20日迄
一．社員ノ氏名住所出資ノ種類及価格責任
　一．金五千円　無限　東京市京橋区新港町５丁目１番地　　松本新吉
　一．金五千円　有限　東京市京橋区越前堀１丁目４番地　　和田剣之助
右、明治37年10月21日登記　　東京区裁判所

この官報記載の登記により、和田剣之助が松本新吉を支援し続けたことが推定される。松本新吉も5,000円出資したようになっているが、この頃製作したピアノがあまり売れていなかった（「松本新吉談話」：資料編引用記事参照）ことから、新吉出資金には和田剣之助の支援金も入っていると思われる。

築地工場の拡張、整備、職人見習い採用と育成【図2-8】により、楽器製造体制ができあがり、銀

座４丁目４番地に楽器店を造ることで、製品の販売体制ができあがった。それまでは、銀座からかなり離れた築地工場(新湊町５丁目)がオルガン、ピアノの販売店でもあった。

明治38年には、ピアノ(７オクターブ、85鍵)が売れるようになった。これは、繁華街銀座の中心(４丁目４番地）に松本楽器店を建てたことによるが、日本海海戦での勝利以後の好景気にもよる。新吉は、「日露戦争後、一躍需要増加し、今日では家庭一般に用いられ、80円位のもの(オルガン)が一番よく売れた」と語っている。(『音楽』第２巻９号「松本新吉氏談」)

明治38年５月の日本海海戦の勝利以後、勝利ムード、平和ムードになり、同年８月１日、日比谷公園音楽堂【図2－9】の開堂式に続き、陸軍軍楽隊の演奏が行われた。松本楽器店がプログラムを作成、松本楽器見習い生が観客に配布したことが報道され、好評であった。

日比谷公園音楽堂は大正12年９月１日の関東大震災で壊れるが、それまで、陸軍軍楽隊、海軍軍楽隊の演奏が定期的に続けられた。

『東京日日新聞』明治38年９月４日「土曜日の公園音楽」

・・・吾人は終りにのぞんで永井楽長に、その熱心に演奏されしと、松本楽器店員総出にてプログラムを配布せし労を謝せざるべからず。

ピアノ製作工程は複雑で、すべてを習得できる職人は限られる。ピアノ組立てが製作の最終工程で、この修業には数年かかり、習得したときの達成感、充実感は格別のものであったことが、『宮さんの調律史』(宇都宮信一)に記されている。築地工場でのピアノ製造は、若い職人の成長期でもあった。製作初期には、ピアノ組立ては松本新吉１人の仕事であったが、職人の成長は順調だった模様で、宇都宮信一が入社(明治44年)した頃には、職工の仕事振りを監督、指導する、いわゆる「現場監督」が数人いたという。ピアノの組立て工程でピアノ全体を仕上げるので、組立てを経験し、習得すると調律師になることができる。松本ピアノ工場で組立てを経験した職人から調律師として自立した職人が多数おり、後日、その人達を中心に、「松友会(ショウユウカイ)」が誕生する。

２．松本楽器店

明治37年11月、松本楽器合資会社の目玉、松本楽器店【図2−10】を銀座４丁目４番地に建てた。(注) 敷地は205坪、地主は宮田城之助。楽器店を建てる前は、伊勢屋の自転車店で、通称「伊勢善」だった。

(注)『音楽之友』(明治37年12月、楽友社)記事：

「・・・松本楽器合資会社なるものを設立し、これが楽器の販売店として、昨月(11月)いよいよ銀座４丁目の大通りにハイカラ式の楽器店を開店」

松本楽器店ができたとき、三越銀座店はまだ建っていなかったが、当時の銀座の絵葉書を見ると、

服部時計店などの店が建ち並び、空地はない。銀座通りは、明治５年の大火の後、東京府知事の主導で全域が煉瓦街になった。明治15年に鉄道馬車が開通し、明治36年に路面電車に替わっている。

松本新吉は、音楽学校(現、東京藝術大学)の学生に松本楽器店のピアノを開放した。明治時代のピアノは高価で、一般家庭では高嶺の花であり、購入できた場合でも、住宅地では、夜中のピアノ弾きは嫌われた。音楽学校のピアノ稽古室にピアノが数台あったが、ピアノ弾きの稽古は受付順で、夜明け前から並んで待つ学生が多く、稽古できない学生が多かったという。三浦環、山田耕筰など音楽学校の学生は松本楽器店開放に感謝している。(『松本新吉伝』(大場南北)による)

長男、松本広(17歳)は明治38年に渡米し、ブラドベリー、パーマー、リバース・アンド・ハリスで学び、明治41年11月に帰国した。新聞に、「調律の天才」と謳われた。(『明治の楽器製造者物語』による)

月島工場

1．月島工場設立　【図2－11、2－12、2－13、2－14】

明治39年２月18日、火事で新湊町５丁目の築地工場は全焼した。明治37年10月に松本楽器合資会社設立してまだ１年余り、明治38年には、日露戦争の勝利で景気回復し、ピアノが売れ出した時期の工場全焼だけに、火災後の対策で、松本新吉の苦労は並大抵のものではなかったことだろう。

松本新吉はくじけず、東京市から埋立地月島西仲通の土地を借り、月島工場新築に着手、同年９月30日に完成し、ピアノとオルガンの製作を再開した。

『東京日日新聞』(明治39年９月30日　松本ピアノ月島工場新設の記事)

> 松本楽器合資会社にては今回月島に新工場を設置し米国最新式の乾燥機木工機械等を取り寄せ一月優に三百台のオルガンピアノを製造するを得るに至れり。

工場設置場所は月島二号地月島西仲通９丁目１、３、５番地の広大な土地で、現在の、中央区勝どき１丁目11番地(勝どきビュータワー、元月島第二児童公園)にあたる。明治40年、東京郵便局編「京橋区全図」によると、月島西仲通１、３、５番地の面積が約2,100㎡である。月島第二小学校は、明治42年、松本ピアノ工場の隣に建てられた。

東京日日新聞の記事「一月優に300台のオルガンピアノを製造するを得る」は大袈裟だが、月島工場はかなりの大きさで、明治40年代の従業員の写真には職工が30人位写っている。明治37年設立の松本楽器合資会社の成長振りがうかがえる。

明治40年の「東京勧業博覧会」(明治40年３月20日～７月31日)に、月島工場で製作したグランドピアノ１台、アップライトピアノ１台、オルガン大小２台、小型ピアノ(５オクターブピアノ)１台を出品し、好評であった。(『東京日日新聞』明治40年４月６日記事)

『宮さんのピアノ調律史』には、月島工場内の職工の働き振りも記されている。高橋七郎、鈴木完治などのベテラン職工は現場監督をしていた。長男広は、組立ての終わったピアノを最終点検し、仕上げの手入れをしていた。明治44年、15歳の宇都宮信一が入社したときは、アメリカで３年間修業して帰国した長男広は23歳だった。仕事場での広は怖い人だったが、腕は確かだった。次男の二郎は18歳だったが、すでに組立てなどをする職工になっていた。宇都宮信一は仕事の呑み込みが早く、入社から２、３年で組立て、仕上げの担当になるが、気立てのいい二郎が親切に指導した。三男の三郎も10代で月島工場の職工として働き、上達が早かった。

明治40年代は、月島工場で製作した松本ピアノと松本オルガンがよく売れた。新吉は、一ヶ月にオルガンが80台、ピアノが６台売れたと言っている。(『音楽』東京音楽学校、明治44年９月「松本新吉談話」：資料編引用記事参照)

『東京日日新聞』(明治40年４月６日、東京勧業博覧会記事)【図2-15、2-16】

松本合資会社出品：グランドピアノ一台、竪ピアノ一台、オルガン大小二台、トーイピアノ一台等にして、同社は近来非常なる活動、勉励を試みつつあるものの如く、其の製品に於いても、価格低廉に関せず、音色、音律ともに優れるものあり。年々販路の拡張する、又、故なきに非ざるべし。

『宮さんのピアノ調律史』(宇都宮信一)記載：

工場には新吉さんの社長室、事務所、新吉さんの長男で「若旦那」と呼ばれていたアメリカ帰りの広さん専有の大きな作業室、それにピアノやオルガンの組立て室、各種の木工室、材料置き場、風呂場、ボイラー室・・・その他があり、規模としては相当なものであったのではないでしょうか。従業員は、わたくしが入りました当時は24、5人。ボイラー専門の機関士や、食堂の下働きの娘さんたちまで入れると、ざっと30人前後でした。銀座４丁目の販売店のほうは少人数で、支配人以下６、７人であったように記憶しています。

その頃の『音楽』(東京音楽学校)掲載の松本ピアノ広告に、月島工場の全景写真があり、「この図は、米国紐育最近発行の音楽商報に「日本におけるピアノ製造所の模範工場」として掲載せられたるもの」と説明が入っている。松本ピアノの月島工場がニューヨークでも報道されていた。

明治45年２月の松本楽器合資会社の広告に、主要な顧客が載っている。

『月刊楽譜』第１号（松本楽器合資会社、明治45年２月１日発行）松本楽器合資会社の広告

(『明治の楽器製造者物語』による)

マツモト　是れ現時東洋に於る楽器需要者の声なり

東京音楽学校　前田侯爵家　東京府師範学校　石本陸軍大臣　古川鉱業会社　東京市各小学校

仏蘭西大使館　新渡戸博士　帝国大学　ザルコリー氏　田中智学氏　本郷座

其他諸名家、各学校に於て新たに弊社製造販売ピアノの御買上げ相成る向、本年に入り益々増加し来れり。亦以て現今専門家は勿論、社会の各方面より独り松本楽器のみ如何に信認せられつつあるかを知られよ。

東京銀座　　松本楽器合資会社

出張所　大阪心斎橋通平野町角

（注）前田侯爵邸は建築費30万円で、東京でもトップクラスの邸宅。

（注）本郷座＝弓町本郷教会（Yumicho Hongo Church：日本基督教団）。

（注）この外に、長野県諏訪高等女学校（現、諏訪二葉高等学校）が明治44年に購入したピアノは現存し、2007年10月19日、創立100周年記念式典（於岡谷市カノラホール）で、名ピアニスト深沢亮子が演奏した。

（注）原敬総理大臣も購入した。このピアノは、現在、盛岡市の原敬記念館に保管されている。

明治40年代に月島工場で製造した松本ピアノはよく売れたが、明治45年７月30日、明治天皇崩御で、国民が１年間喪に服することになった。

国内の学校などにオルガンが普及したが、ピアノはあまり広がらない。

音楽の普及に努め、九州帝大にフィルハーモニー管弦楽団を作ってベートーベン作曲交響曲第九番演奏会を開いた榊保三郎（サカキヤスサブロウ）（九州帝国大学教授、医学博士、文学博士）は、大正２年６月、『音楽』（東京音楽学校）に評論「苦言一束」を寄稿した。国内の音楽普及を目指す榊教授が、楽器商、楽器製造者、音楽家、購買者、音楽中枢当局者など、あらゆる分野の人達への要望を伝えるものである。「苦言一束」で、

音楽の普及を図るには、まず、ピアノを普及させるのが最急務である。

として、現状の問題点、解決すべき課題を指摘している。

楽器製造者の問題点については、ヤマハピアノと松本ピアノを新品購入から約３年間にわたって変化を詳細に調査し、欠点を指摘した。（資料編：引用記事参照）

ヤマハピアノに関する記事の一部：

山葉製造会社のピアノは、アクションが悪い。そのピアノは、始めのうち、すなわち、買いたてのうちは、甚だ良いけれども、一、二年たつと、不快なキシル音がガタガタした雑音を出すようになる。而して、鍵板（ママ）が不愉快に固くなってくる。ハンマーが二度打ちを始める。要するに、鍵板とアクションとの接続が一時姑息的の方法を用いているから、一、二年のうちにだんだん変化してくるのであろうと思う。同会社は、専心アクションの改良をつとめなければ、名声を墜すことになるだろうと思う。

松本ピアノに関する記事の一部：

松本製造会社のピアノは、今迄は音楽家および音楽教師仲間のうちに、評判がよろしくなかった。が、自分が使ってみると、何故に斯く誹謗されたか、という感じが起こる。第一番に、自分が実験した結果にみると、同ピアノは、新たに購入してから一年程には、音律が非常に狂いやすい。はじめの半年の如きは、ほとんど言語道断であった。しかし、その時期を過ぎるというと、音程が固定してくる所を以てみると、鋼鉄線の張立のものを販売すると見える。名声不振の原因は、実にこれにあるだろうと思う。それで、アクションや音の性質(張金の性質)や、木材の構造等には、別に非難すべき所はないようである。

「アクションや音の性質(張金の性質)や、木材の構造等には、別に批難すべき所はないようである」「売価についても、山葉のよりも100円以上の廉価である。で、これは自分が嘗て製造主に説いた所が、同会社は、これを聞いて、昨年来より実用ピアノというのを製造したのは、大いに悦ぶべき現象である」 榊保三郎は、このように「松本ピアノ」を評価している。

榊保三郎の「苦言一束」は見解が偏り過ぎているとして、猛烈な非難が寄せられたようだが、榊教授は、大正２年８月、同誌に「苦言一束のたしがき」を載せた。

「九大工科教授工学博士山口修一君の助力で、数学的に解析した結果、山葉の広意の「アクション」は、松本のに比して、Ａ´Ｍが約13倍もある故、甚だしく不利益なり。以上の證明によって、山葉の機関は不利益であるということは、明らかなことである」

と結論した。この寄稿は力学的な図解入りで、詳しく解析している。

『音楽』(東京音楽学校)の《編纂後言》

□ 本誌６月号に、榊医学博士の苦言一束を載せた事について、一部読者の誤解を生じ、執筆者たる博士及び我学友会の幹部の方へも、その誤解より結果する言葉を洩された人があったそうである。そこで、博士は、その補遺として、この一篇を寄せられたから、本月号に掲載して博士にはその言わんとするところを尽し、誤解者には誤解を氷解させる機会を与えることにした。

□ 本誌の主張は、不偏不党である。

□ 論旨の聴くべきものがあっても、動機用語の真面目を欠き、誠意を有せざるものは、如何なる社会的物質的学術的権威の筆になったものであっても、これを聴くことはあろう。しかし、これを誌上に掲載する事は断じてない。無責任なる匿名の悪口罵詈の如きは、決して神聖なる『音楽』誌上に、余白すらも見出し得ざるべき事を断っておく。

『日本のピアノ100年』記事：榊保三郎（サカキヤスサブロウ）

九州帝国大学教授、医学博士、文学博士。明治40年代に日本最古の音楽団体「九州大学フィルハーモニー」生みの親で、ヴァイオリンの名手。精神病理学研究のためドイツに３年間留学を命じられた際、ベルリン国立音楽大学学長のヴァイオリニスト、ヨーゼフ・ヨアヒムに師事して腕を磨き、音楽の勉強にも情熱を傾けた。帰国後、「この日本にも、音楽が、音楽を楽しむことが人生だという日がきっと来ると信じている」と言っていた。

松本新吉がよく言ったと伝えられる言葉「全国の各家にピアノ１台、自動車１台の普及」（『松本新吉伝』）と、榊博士の「苦言一束」に一脈相通ずるものが感じられる。

『音楽』（大正２年６月）「苦言一束」の文、「七八年前の製造と今日の製造とは、非常に進歩した所が見える」の「今日」は、明治43年頃のことと思われる。（「三、四年使っても、キシリと、ダタダタすることは決してない」から推定）　築地工場で作り始めた頃の松本ピアノと比べて、明治43年頃、月島工場で作られたピアノは非常に進歩していることは、ピアノ作りの職人の進歩を示している。渡米して３年間修業した松本広が、明治41年から月島工場で仕事しているが、『宮さんのピアノ調律史』に、松本広は、組立ての終わったピアノの最終点検をして、総仕上げに手を加えたことが記されており、それも品質向上に寄与したことだろう。

２．楽器店の変遷

明治43年６月、メソジスト銀座教会堂建築費募集が始まったとき、和田剣之助、松本新吉と並んで、大倉文二が建築委員（15名）になった。

『日本メソヂスト銀座教会歴史（銀座教会四十年史）』では、銀座教会の写真の次に、「最初の財団理事」５人（安藤太郎、寺村鐵造、和田剣之助、大倉文二、川崎芳之助）の写真が載っている。この５人は、明治43年６月に作られた銀座教会堂建築委員でもある。しかし、明治35年７月の「中央美以教会新築費募集主意書」の募集委員長が和田剣之助で、松本新吉等15人が委員になっているが、大倉文二の名は入っていないし、明治40年までの銀座教会入会者名簿にも入っていない。『松本新吉伝』（大場南北）では、

「当時羽振りの良かった大倉洋紙店主大倉文治という人物がそのバックにあって、松本楽器店の銀座進出となった」

と記されているが、大倉洋紙会社の社長大倉文二が松本新吉のピアノ製作を支援し始めたのは月島工場設立頃からのようで、明治37年11月の銀座４丁目松本楽器店建設には関与していなかったと思われる。明治39年の築地工場火災の翌年、明治40年の地図では、新湊町５丁目区画内の西側、新栄町５丁目の部分が大倉印刷所で、松本オルガン工場跡地と同じ位に広い土地を占めている。

明治42年２月、大倉書店に勤めていた山野政太郎、芝栄吉、山本静雄が松本楽器店の社員になった。（明治42年２月16日登記）

官報　第7707号　明治42年３月９日

○商業登記

松本楽器合資会社登記事項中左ノ如ク変更ス

一．代表社員ニ左者　明治42年２月13日就任ス

代表社員　　山野政太郎

一．目的ヲ同日左ノ如ク変更ス

楽器ノ製造、販売、賃貸、仲介竝に木金工業　及之レニ付帯スル事業ヲ営ムヲ以テ目的トス

一．社員和田剣之助ハ明治42年２月13日、其持分ノ内金三千五百円ヲ山野政太郎ニ、金千五百円ヲ芝英吉ニ譲渡シテ退社シ、之ヲ譲受ケタル山野政太郎、芝英吉ハ同日入社ス

一．金三千五百円　　無限　東京市京橋区銀座４丁目４番地　　山野政太郎

一．金千五百円　　同　　同市日本橋区通１丁目19番地　　芝　英吉

一．社員松本新吉ハ明治42年２月13日、其持分ノ内金二千円ヲ社員芝英吉ニ、金三千円ヲ山本静雄ニ譲渡シテ其出資ヲ労務ト変更シ、之ヲ譲受ケタル社員芝英吉ハ其出資額ヲ三千五百円ト変更シ、山本静雄ハ同日入社ス

一．金三千円　　有限　東京市日本橋区通１丁目19番地　山本静雄

明治42年２月16日登記　　東京区裁判所

この登記により、松本楽器合資会社の出資者は、松本新吉、和田剣之助から山野政太郎、芝英吉、山本静雄に変更し、合資会社設立時の目的「各種楽器の製造販売及其賃貸を営業とす」から、「楽器製造、販売、賃貸、仲介竝に木金工業、及之に付帯する事業」に代わった。

（注）芝英吉、山本静雄の住所「日本橋区通1丁目19番地」は大倉書店所在地。大倉書店は1905年10月に夏目漱石の作品１号「吾輩は猫である」第１巻の初版を発行している。

松本楽器合資会社の代表社員として登録された山野政太郎は、築地工場の火災と月島工場建設で負債が多くなった会社を回復させるため、目録を作って配布した。

（資料編：引用記事カタログ参照）

製作オルガン、ピアノ全品目の写真入りカタログ【図2−17】で、取り扱い楽譜と書籍、ヴァイオリンなど、オルガン・ピアノ以外の楽器、蓄音器とレコードなど、扱い品目を広げ、詳細に紹介。楽器店から音楽専門店に拡大したようになっている。

書籍の販売では、書籍自体のカタログが有効であることは、大倉書店勤務で身につけたのだろう。

明治45年２月に松本楽器店名で『月刊楽譜』【図2−18】を発行した。『月刊楽譜』の主幹山本正夫は、

『音楽界』の主幹でもあり、当時の雑誌編集の第一人者であった。内容は楽譜に限らず、楽論、楽説、楽話、楽評、楽報などからなり、執筆者は国内の各層にわたっている。例えば、音楽評論家大田黒元雄は「舞踊と音楽」「「古城の鐘」所見」を書いており、堀内敬三は「歌劇「カルメン」の音楽」を寄稿している。この雑誌は昭和16年まで発行され、昭和16年12月１日、『音楽世界』『音楽倶楽部』と合併して、現在の『音楽の友』になった。

山野政太郎の行動に、楽器店を音楽専門店に拡張する意気込みが感じられる。

明治40年代は音楽関係の雑誌が増えている。日露戦争での勝利以来、ピアノの販売数が増えだした時期でもあり、明治初期の文明開化とは違い、学校の教育充実もあり、西洋文化吸収層が増えたことの表れでもあろう。京都市三条寺町東入の十字屋田中商店(東京銀座十字屋の京都支店)が明治40年に『音楽世界』を発刊し、明治41年には、『音楽新報』と『音楽之友』が合併して『音楽界』(楽界社)が誕生した。雑誌記事も多様化し、「楽器の弾き方」や、巖本捷治(後の松本楽器製造株式会社監査役)の連載執筆記事「京都楽界に望む」など、楽界への要望記事も目立つ。

楽器店名の変更

大正４年３月20日、銀座４丁目の松本楽器店の名称が山野楽器店に変る。

官報　第798号　大正４年４月２日

○合資会社（設立）

一．商号　合資会社山野楽器店

一．本店　東京市京橋区銀座４丁目４番地

一．目的　楽器及其付属品ノ販売竝ニ雑貨類ノ輸出入業

一．設立ノ年月日　大正４年３月20日

一．存立ノ時期　　大正４年３月20日ヨリ同24年３月19日迄満20箇年

一．社員の氏名住所出資ノ種類価格及責任

　金八千円　無限　東京市京橋区銀座４丁目４番地　　山野政太郎

　金二千円　有限　東京府豊多摩郡大久保町大字西大久保459番地　　山野ソノ

松本楽器合資会社（追加）

一．解散ノ事由及年月日　　存立時期ノ満了ニ因リ大正３年10月21日解散

右　大正４年３月23日登記　　東京区裁判所

官報　明治37年第6397号(10月25日)に、「明治37年10月21日に設立した松本楽器合資会社の存立期間は明治47年(大正３年)10月20日迄」とあり、大正３年10月21日は合資会社終了日だった。

大正４年３月20日設立の合資会社山野楽器店は、大正３年10月に期限が切れた松本楽器店を引き継

ぐ体制をとり、『月刊楽譜』第４巻第４号(大正４年４月)の発行所は、「松本楽器合資会社改め　合資会社山野楽器店」となっている。

大正４年５月、『音楽界』(楽会社)記事に、「旧社一切の権利義務を継承し、旧社員一同と共に、勉励努力を以て、優良楽器の製作販売修繕等の諸営業に従事する」とあり、松本ピアノ販売体制を維持しながら、販売品目の拡張に努めている。

『音楽界』（楽会社）（大正４年５月）

東京月島に工場を有し、銀座４丁目に販売店を有して、帝国楽器界三大商舗の一に数えられし松本楽器合資会社は、本年三月を以て公定存立期限満二十ヶ年に到達せしため、株主総会の結果、さらに売品改良業務に拡張等種々同社の諸弊を一洗するため、在来の営業主任支配人山野政太郎が挙げられて社長の任に当たり、一層の発展を期すべく、種々組織を改廃のため、名称も「合資会社山野音器店」と改め、在来の位置に於て旧社一切の権利義務を継承し、旧社員一同と共に、勉励努力を以て、優良楽器の製作販売修繕等の諸営業に従事すると。

明治37年10月に設立した松本楽器合資会社の存続期間終了を期に、楽器店経営方針論議があって、ピアノ・オルガン作りに熱中する松本新吉と、会社の借財返済と音楽普及に熱心な山野政太郎の方針の違いが埋められなかったのかもしれない。松本ピアノ・オルガン製造元の松本新吉は、柳町(ヤナギチョウ)(注)に楽器店を開き、楽器店分離の形になったが、互いに相手を貶すことはなく、山野政太郎は、銀座４丁目の松本楽器店開店日を記念して毎年紅白饅頭を配ったという。

柳町楽器店の広告（大正4年5月）

革新せる　松本のピアノとオルガン

栄光ある二十有余年の歴史を有し、名声内外に轟き亘る我が松本ピアノ・オルガン製造所は、その販売店を新たに京橋柳町に設けたり。これ、真正なる松本楽器店主松本新吉が、その名誉と信用を確く保留せんが為、万難を排しての大英断なり。多年、米国にて楽器製造法を研究されたる所長松本新吉が厳格なる監督の下に、刻々製出さるる松本ピアノ・オルガンは、今後、陸続として前記松本楽器店より現るべし。弊工場、昨冬、災難の襲う所となりたり。然れども、この貴き犠牲は、これ実に短所を避け、新しきに就くべく、天の我等に与えたる絶好の機会たらずんば非ず。弊工場は、その豊富なる材料と卓越せる技能とをもって、今後益々楽会の為、将た又、国家の為、努力せんとす。乞う、確実にして旗色鮮明なる松本楽器に倍旧の御同情と御指導とを垂れ給わらんことを。再び曰す。栄光ある二十有余年の歴史と経験を有する我が松本楽器製造所は、その販売所を京橋柳町に設けたり。

京橋柳町　松本楽器　店主　　松本新吉

(注) 京橋柳町：別の広告に「発売元　東京市京橋区柳町９番地　松本楽器店」とある。現在の地下鉄「宝町」駅に近い。

３．月島工場の災難

(1) 月島工場の火災

大正３年12月28日夜出火、月島工場が全焼し、隣の月島第二小学校も全焼した。月島西仲通９丁目

１番地に工場を建て直したが、東京市からの借用地は狭くなった。明治39年９月に建設したときの月島工場敷地は、月島西仲通９丁目１番地、３番地、５番地だったが、大正４年に再建したときの敷地は、月島西仲通９丁目１番地だけで、面積は３分の１になっている。【図2−19、2−20】

(2) 台風による高潮

大正６年９月30日～10月１日、東京湾に台風が侵入し、最高水位が＋３ｍであった。この高潮は暴風津波ともいわれる。この高水位は東京湾の記録で、まだ破られていない。

「大正６年東京湾台風が生み出した関東大震災対応策(北原糸子)」に載っている、「東京公文書館蔵行政文書(大正６年)」記載の表「東京市大正６年暴風雨各区被害」によると、京橋区の被害が特にひどいものだった。水位１丈２尺（約3.6m)、死者24、全壊128、半壊214、床上浸水3,219などで、被害が集中したのは月島だった、と記されている。松本ピアノ月島工場は壊れなかったものの、浸水などによる被害は大変であったことだろう。

（注）日本の高潮の記録は、昭和34年の伊勢湾台風で、最高水位は＋3.89m。

(3) 松本楽器製造株式会社新設と関東大震災

大正12年４月３日、松本楽器製造株式会社を新設、登記した。資本金は15万円。社長松本新吉、専務松本広(長男)、取締役松本利助(弟)、同山東隆(長女栄(エイ)の夫、旧紀州城代家老子孫、参議院議員山東昭子の大叔父)、同近藤允蔵(三女光代の夫、つねの親類)、監査役巖本捷治(ヴァイオリニスト巖本真理の父、音楽評論家)、同和田剣之助(医師)、同秋山眞澄(弁護士)、全員がクリスチャンである。

官報　第3307号　大正12年８月８日

○株式会社設立

一．商号　松本楽器製造株式会社

一．本店　東京市京橋区月島西仲通９丁目１番地

一．目的

一．松本ピアノ松本オルガン其他一般楽器家具類ノ製造及販売

二．音楽書類ノ出版及販売

三．楽器類及音楽書類ノ輸出入及仲買代理業

四．前各項ニ関連スル一切ノ業務

一．設立年月日　大正12年４月４日

一．資本総額　　金十五万円

一．一株金額　　金五十円

一．広告方法　東京市ニ於テ発行スル時事新報ニ掲載ス

一．取締役ノ氏名住所

松本新吉　　東京市京橋区月島西仲通９丁目１番地

松本　広　　東京府荏原郡平塚村字下蛇窪300番地ノ１号

山東　隆　　東京市芝区白金今里町89番地

松本利助　　同市京橋区月島西仲通９丁目１番地

一．会社ヲ代表スベキ取締役　　松本新吉

一．監査役ノ氏名住所

巖本捷治　　東京府北豊島郡西巣鴨町660番地

和田剣之助　同府豊多摩郡渋谷町大字青山南町７丁目１番地

秋山眞澄　　同府同郡千駄ヶ谷町原宿85番地

一．存立期間　大正42年４月３日迄

大正12年９月１日　関東大震災

地震は持ちこたえたが、火災で焼滅。新会社が５ヶ月足らずで解散。

借地は月島西仲通９丁目12番地に変わり、さらに狭くなった。昭和８年の月島地図に記載されている松本ピアノ工場の敷地は約360㎡。明治39年９月、月島工場新設当時の借地(約2100㎡)の約６分の１になる。

再建工場は、大正13年１月完成。大正13年６月、「復興記念ピアノ第１号」を出荷。「復興ピアノ」は飛ぶように売れた。「いささか粗製乱造」の評(『宮さんの調律史』)もあるが、この販売により、月島工場再建関連の借財は返済できたことだろう。

(4) 空爆

昭和20年３月10日の大空襲で月島工場は全焼し、月島工場の終止となった。

４．長男広

月島工場を継いだ長男広は明治22年生まれ。明治38年、17歳で渡米。ブラドベリー、パーマー、リバース・アンド・ハリスでピアノ作りを修業し、明治41年11月に帰国した。新聞に「調律の天才」と称えられた。(『明治の楽器製造者物語』)

明治44年、宇都宮信一が月島工場に入社したとき、広は、組立てが終わったピアノの最終点検をしていた。(『宮さんの調律史』)

関東大震災の後、大正13年１月に月島工場が再建されると、長男として月島工場を継ぎ、６月に「復興記念ピアノ」を発売した。全国から注文があり、年末には月産50台に近づいた。

広はコンサートグランドピアノを作るなど、新型のピアノを先駆けて作る積極経営型であった。『音楽の友』(昭和51年８月号「楽器の王　ピアノ　日本のピアノ(７) 創世期の先駆者たち」泉清)の「松本ピアノ」の項目に、「エチ松本ピアノ工場沿革」の記載がある。

『音楽の友』（昭和51年８月号「楽器の王　ピアノ　日本のピアノ（７）創世期の先駆者たち」泉清）「エチ松本ピアノ工場沿革」の一部：

・・・・続いて当主松本広渡米し、ニューヨークなるブラドベリー・ピアノ会社、パーマー・ピアノ会社、リバース・エンド・ハリー・ピアノ会社等の研究生となり、専心ピアノ製造の奥義を極め、帰朝後諸般の改良を図り、世界的優良ピアノの製作に専念し、大正十二年大震災直後、工場組織の大改革を断行し、爾来、其の製品は各学校始め専門大家の愛用さるる処となり、さらに、昭和四年には世界各国のピアノ製造会社に於て最も至難とさるる本格的コンサートグランドピアノの製作に成功し、以て今日の盛名を博するに至りました。

このように、松本広は昭和４年にコンサートグランドピアノを作り、自動ピアノも作っており、世の中に先駆けて新型ピアノを作る積極型であった。昭和５年９月、全国ピアノ技術者協会が発足したとき、５人の常任委員の一人に選ばれている。

月島工場を長男広が継ぐことが決まっていたようで、二郎以下の弟は月島工場を離れ、それぞれが選んだ音楽産業で自立した。

松本家二男以下の暮らし

二郎	（明治27年生まれ）：明治44年、宇都宮信一(15歳)が見習いとして入社したとき、18歳の二郎がいろいろ教えたという。（『宮さんの調律史』）18歳で見習い工に教えたことから、二郎は、15歳頃（明治41年）には月島工場で働いていたものと思われる。月島工場でピアノ組立て、仕上げをしていた二郎は、大正10年に大阪三木楽器店に移り、調律技師になっている。
三郎	（明治29年生まれ）：二郎と同様、十代で月島工場のピアノ作りを始めたようだ。関東大震災の後、三郎は、九州帝国大学の榊教授宛の添書きを持って九州博多に行き、「松本ピアノ商会」を興した。
四郎	（明治31年生まれ）：立教中学校、東京音楽学校を卒業し、松竹の楽長指揮者になり、音楽界で幅広く活動した。今東光、谷崎潤一郎等との交流が知られている。
五郎	（明治32年生まれ）：病弱だったようで、大正６年５月に死去。19歳だった。
新治	（明治39年生まれ）：青山学院に通学していた頃は、自動車に惹かれていたが、関東大震災の後、八重原工場が建てられると、ピアノ作りを始め、八重原工場を継いだ。
剛夫	（大正３年生まれ）：名古屋中学校卒業後、八重原工場でピアノ作りに努め、全工程を習得。戦時中、ピアノ作り中止時には家具類製作も実施。昭和20年11月、新治死亡後、八重原工場を継いだ新治夫人和子を手伝った。